「御霊に属する人、肉に属する人」　丸屋信也著　いのちのことば社より　まとめ

**☆２健全な信仰(御霊に属する人)へ成長するには**

**Ⅱ　キリストの心で見るⅠコリ2：15-16**

「御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによってもわきまえられません。いったい、

「だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。」ところが、私たちには、キリストの心があるのです。」

＊御霊に従って歩むというのは、キリストの心を持つこと。霊的真理と霊的知恵をもって、物事に対して主の見方と

　　同じような理解をして判断や決断をし、行動すること(Ⅰコリ12：2)「神のみこころは何か、すなわち、何が良い

　　ことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知る」**ex１**親しい同僚からの誤解に対して、**肉の心**(自己中心)は、人の評価で自分を見ているため、他人の誤解は大きな脅威。ショックを受けて心のバランスを乱し、

動揺する。「あんなに信頼していたのに裏切られた」「もう信頼できない」しばらくすると「クリスチャンなのに怒ってしまった、赦さなければならないのになかなか赦せない」そして「自分はダメなクリスチャンだ」と結論づける。**キリストの心**で見ると、最初は「なぜ？」と思うが、心の中心には「神の前に受け入れられている自分の姿」があり、自分は赦され受け入れられているという平安が与えられるので動揺はあまりなく、事実を把握

するために情報を集めることに心が向く。このプロセスが神の御心をわきまえ知る始まり。御霊が導いて下さり、誤解の真相が少しづつ解明され、どのように行動するかの知恵も与えられる。多くのクリスチャンが人と自分を比べ、「自分には能力がない、信仰が足りない、賜物がないので役に立たない」逆に「自分はあの人より霊的だ」と思うことがある。これはキリストの心から離れている姿。**ex2**眉と目の例え。目は自分を高度な器官だと自負していて、単なる毛の集まりに過ぎない眉が自分の上にいることにどうしても納得がいかない。それをイエスさまに訴え、その話をイエスさまから聞いた眉は、「わたしはどこへでも行きます。目の下でかまいません」と答え、目が上で、眉が下になった。涼しいうちはそれで良かったが、暑くなり汗をかき始めると、汗が目に入って、

開けていることができず、目は機能を果たすことができなくなってしまった。その時、目は初めて、自分が眉に

助けられていたことを悟った。イエスさまは目に「君は高慢だ」という代わりに、眉なしではせっかくの高度な機能を果たせないということを、体験を通して気づかせて下さった。自分では自分の賜物を用いて実を結ぶような働きをしているつもりでも、キリストの心で見ると、実はそれは多くの人たちの目につかない助けがあって

成り立っているものだとわかる。だから私たちは自分を見る時に、必要以上に高く見る必要も、低く見る必要もない。あなたが目/眉だとしても、それぞれの役割が与えられており、お互いの助けなしには本来の働きを果たせない。それは決してどうでもいいものではない。自分と人を比べるのは、自分で作った勝手な基準、自分の律法に基づいた判断。御霊に属する人はキリストの心で見ることができるため、自分がイエスキリストの十字架に

よって完全にゆるされ、100％受け入れられていることを知っているので、その恵みに心から感動し、感謝し、

その愛と恵みに応えていくことが動機となり、主に仕え、人に仕え、教会に仕えていくことができ、自分の賜物を他と比べる必要はなくなる。

１ひとりよがりにならない　＊自分の手に握りしめているものを手放す。私たちは、キリスト以外のもので、自分の心の穴を埋めようとすることがあり、それが偶像になるが、無意識にしているので、自分にも他の人にもわからず、むしろ、熱心に祈り、奉仕し、聖書を読んだりするので、かえって熱心な信仰と見えてしまう。しかしそれが自己中心の結果であった場合、他人を支配するというかたちで現れる。自分の願っているように他人を支配してしまう。

人間関係で悩む人はそこに問題がある。相手に問題があるように感じても、実は自分の自己中心性の現れとして無意識のうちに相手を支配しようとしている可能性がある。これは自分一人で気づくことは難しく、人との関わりを通して気づかされていく。**ex3**教会の会議に出席している時、人と違う意見を持ち、それを率直に表明するのは

良いことだが､話し合いの結果､最終的に自分の思った事と違う結論が出た時に、いつまでも自分の意見にこだわり続けるなら、それは支配しようとするところから出ている、幼子のような振る舞い。だれの心の中にも、その奥底には独裁的な部分はある。そのことを意識したうえで対処しなければならない。真の愛は相手にNOという自由を

保障する。神さまも私たちにこの自由を与えて下さっている。真の愛とは互いに心から仕え、助けたいと思う。

相手に益となり、自分にできることならやってあげたいと思う。時には相手の願いに対して、できない時もあり、NOを言っても良いし、言われた方も、それを残念に思っても、快く受け入れるかかわり方が保障される関係に

おいてのみ、真の愛が生まれる。

２恵みによって自分の心を探る＊自分の手に握りしめているものがあると、何かにこだわりすぎるという問題も出て

くる。「だれに何を言われても、これだけは譲れない、手放せない」、それは自己中心の現れである場合がある。

こだわる対象が悪いものでなくても、こだわっていることに無自覚でいるうちに、それに依存してしまうことが

よくある。ゲーム、インターネット、携帯、果てはギャンブル、薬物。そうなれば、自分の体調を悪くしたり、

仕事を失うなど、破壊的な側面がある。多くの人がそれに依存する本当の理由に気づくことができない。それは

自己中心性の現れだが、どんな姿の自己中心なのかということは、心の深いところを御霊によって探っていただかなければわからない。その問題を自分のこととして受け止めるには、御霊によって教えられ、励まされ、心を扱われる必要がある。人は本当に愛され、受け入れられているという安心感がある時にこそ、自分自身の根の深い問題を直視できる。律法的な信仰を持っていると、自分の問題に触れることが怖くなってしまう。神によって受け入れ

られているという安心感がないため、自分の本当の姿を明らかにされた時、それを受け止める安心感がない。

人が頑なに握りしめているものを手放させていく力は、その人を支配することではなく神の恵みを体験することが必要不可欠。神の恵みとは神に愛されるにふさわしくない者が愛されること。それを味わうチャンスは、自分は

ダメなのではないか、このままでいいのかと思う時にこそやってくる。神さまに愛され、祝福を受けるために

これこれをしようと考えるのが**肉に属する人**。こんな自分のためにイエスさまは十字架にかかって下さったのだ、

こんな私に神の愛が注がれているんだということをかみしめる人は、聖霊に従って歩み、霊的なおとなになって

いくことができる。そういう人が**御霊に属する人**。

３すべての面で調和する　＊聖霊によって歩み、霊的な大人になってゆくとはどういうことなのか。

　「私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全なおとなになって、キリストの満ち

満ちた身たけにまで達するため。…キリストによって、からだ全体は一つ一つの部分がその力量にふさわしく

働く力により、また備えられた　あらゆる結び目によってしっかりと組み合わされ、結び合わされ成長して、

愛のうちに建てられるのです。」エペソ4：13-16　＊ひとりひとりがディボ-ションをし、祈り、奉仕をして

成長するとともに、お互いに組み合わされて愛のうちに成長していくことが大切。目だけが成長し、他の器官の

あら捜しをしたり、耳だけが成長して他の器官の噂話を集めて回るなら、そんな教会には誰も近づきたくないでしょう。おとなとは、ある部分だけが成長してなるものではなく、全体がバランスよく成長していってなるもの。

＊自分の成長にのみ関心があって個人主義に陥る信仰は肉に属する人のもの。反対に自分のことはそっちのけにして、他人のことばかり考えて助ける姿勢も、犠牲的愛だと勘違いするが、どこかで壁にぶつかる。私たちは神では

なく、神の被造物ですから、自分自身が絶えず霊的にも肉的にも補給され続けなければならない存在。自分を

顧みずに無理をし続ければ、疲れ果てて燃え尽きてしまう。必要な休みを取り、心と身体を満たされながら、

継続して働く。＊**ex4**働き盛りに鬱になった会社員：休みも取らずに仕事に邁進し続けて、5-10年経ったところで倒れ、2-3年休職し、職場復帰した時、「こういう経験をして良かった。あのまま突っ走っていたら、死んで

いたかもしれない。鬱を経て、自分の人生観が変わった。出世はできないかもしれないが、自分らしく仕事が

できるようになり、今は充実している。」　＊**ex5**一生懸命働き続け疲れ果てて倒れてしまう牧会者の例：疲れを

覚えながらも「主により頼んで」と考えて踏ん張ってしまう。こういう考え方も実は、自分のこだわりから来ている。「主に力をいただけば大丈夫」「献身とはこういうことだ」と自分で決めてしまっている為に、周りのアドバイスに耳を傾けない。＊自分の限界を知りつつ、その上で神に依存しながら隣人を愛して行く時、その隣人は援助者を越えて神を見ていくことができる。逆に自分をケアすることなく犠牲にして隣人を助けようとすると、助けを受けている人は助けてくれている人を神のように見て、どこまでも依存していくことになってしまう。

これは健全な関係ではなく、聖書が教えているのとは違うこと。